君の
イマジネーション

雨音多一

1

　君のその体は、親から貰ったものである。では、君の想像力はどうか。それは人類から貰ったものである。人類の英知は、脈々と幼い子に受け継がれてゆく。本を通して。歌を通して。時に薄闇のようなそれは、行動の際に心強い友となる。想像力は一過性の衝動ではない。長く続く季節のようである。冬が次の春に芽吹くように、ゆっくりと現れてくる。

　風間育子は、机の引き出しから、封をされた小さな包みを取り出した。愛らしい瞳に、やさしい影が映る。包みはキャンディのような甘い彩りをしていた。それは育子の姉からの誕生日プレゼントだった。育子はゆっくりと封を開けた。

　風間育子、十七才高校生。将来は何か文章を書く仕事に就きたいと思っていた。それは育子の姉、風間徳子の影響である。徳子は、フリーペーパーのライターをしていた。徳子は七つ上の二十四才。フリーペーパーは街の情報を掲載する、いわゆるタウン紙で十年続く歴史があった。

「育ちゃん、お誕生日、おめでとう」
「ありがと、お姉ちゃん」
「コレ、プレゼントね」
　昨晩、徳子はそう言いながらプレゼントを渡してくれた。

　――白の万年筆。
　鮮やかな包装紙から出でたのは、シンプルでカジュアルな万年筆だった。
「素敵。何を書こうかしら」
　育子は箱から万年筆を出してインクを充填した。
「お姉ちゃん、もう起きてるかな」
　育子は早朝のキッチンへと向かった。姉の徳子はキッチンで紅茶を飲んでいた。傍らで育子の父、風間典之が新聞を読んでいる。
「おはよう、お姉ちゃん、お父さん」
「ああ、おはよう」父の典之は気だるげだ。
「育ちゃん、おはよ」
　徳子が育子のマグカップを手渡した。
「ありがと。お姉ちゃん、プレゼント有難うね」
「うん」
「何を書いたらいいかな」
「前に、『小説を書きたい』って言ったじゃない」
「そうだけど……」
「人に見せる、と思って書くと緊張するのかな？」
「ううん、漠然としすぎていて、よく分からないの」
「じゃ、日記はどう？」徳子が問うた。
「うん、でも……」
「いいじゃないか、日記。お父さんも賛成するよ」
「うん……。だけど……」
　いつになく、育子は歯切れが悪かった。
「どうした、育ちゃん」
「うん。物を書くって何なのかな……」
「物を書く？」父の典之が訊き返した。
　少し宙を見つめて、徳子は話し出した。
「育ちゃん、それはね、想像力よ。イマジネーションよ」
「想像力？」育子は反復した。
「うん。相手が何を思うかを想像するのよ。自分が何を表現したいかではなくてね」
「逆かと思った」育子は目を輝かせた。
「これは私の仕事での経験なんだケドね。『こう書いたら、違ったふうに解釈されるかな』とか、『こう書いたら、嫌な思いをするかな』とか、いつも考えるのよ。相手を思うのよ」
「そうなんだ」育子の声が弾んだ。

「新鮮な見方だな」典之も頷いた。
「うん。あとはね、文て、残るものなのよ」
「使い捨てではなく？」
「そう。心に残るものなの。その時の感情や感動は何物にも勝る、得難いものなのよ」

　三人はしばしの沈黙を保った。それは夏の雨後のように爽やかな空気感だった。
「さ、ご飯にしましょ」
　母の風間逸子が、オーブンレンジの前からグラタンの皿を持ってきて、声を掛けた。
「そうだね。あ、これ。徳子の会社のフリーペーパーが挟んであるな」と典之。
「どれどれ、お母さんにも見せて」
「今日発行日だった」
　母の逸子を中心に、フリーペーパーの輪ができた。みんなで一つの紙面を見つめる。
「コレ、おいしそう」
「ああ、ムシパン屋さんね。出来立てがすごく美味しいのよ」
「こっちも良いな。肉厚なステーキ！」
「あ、このお店、すごく盛りが良いらしいのよ」
「そのお店、お母さんも行ってみたいな。育ちゃん、今度みんなで行ってみましょうよ」
「お母さんのおごりよねぇ」徳子がほほえむ。
「あら、お父さんのおごりよねぇ」
「まあ、そうだね」
「やったね、お姉ちゃん」
　育子と徳子はハイタッチをした。

四人は朝食のテーブルを囲みながら、会話を続けた。
「徳子お姉ちゃんの仕事って、なんか格好良いよね」
　にこやかに育子が話しかける。
「ありがと、育ちゃん。でもね、割と地味なのよ」
「見た目より？」
「うん。見た目より」
「そうかなぁ」育子は訝しげだ。
「そうよ」徳子が笑う。
「ライターの仕事って大変そうね」母の逸子は心配性で、いつもそんなことを呟くのだ。
「この間はね、午前様だったのよ。でも大丈夫。慣れの問題ね」
「私もお姉ちゃんみたいになれるかな」
　少し俯いて、育子が呟いた。
「育ちゃん、大丈夫よ。育ちゃんが想像力を使えるなら」徳子が力強く告げた。
「うん。ありがと、お姉ちゃん」

「みんな、どんどん食べてね」母の逸子が声を張った。

2

　育子は机に向かうと万年筆のキャップを取り、ノートに書き始めた。
『カルダ国のイッソクさんは、冒険の旅に出ました』
　——どんな旅にしよう？
　育子はそこまで書くと、行き詰った。この先は何がいいのかな……。
『戦士の家に生まれたイッソクさんは、お父さんを探して、家を出たのです』
　幾ら考えても、先が続かない。
　——そうだ、お姉ちゃんに相談しようか。

「お姉ちゃん、今、時間ある？」
　徳子の部屋のドアをノックして、育子は入った。
「どうした、育ちゃん」
「うん。物語を考えたんだけど、煮詰まっちゃって……」
「どれどれ、見せてごらん」
　徳子はそう言うと、育子からノートを受け取った。
　ノートをめくって徳子が読み始めた。物語はまだ数行しか書かれていない。
「育ちゃん、面白いよ」
「ホント？」
「この先ね？」
「うん。何を書いたらいいのかな」
「小説の場合は、テーマを先に決めるのよ」
「テーマ？」
「うん。何を書きたいのか、どんなストーリーにしたいのかを決めるのよ。それをプロットと呼びます」
「そうなんだ」育子は頷いた。
「それを別の紙や頁に書いておくのよ」

　そんなアドバイスを徳子は十分間位続けた。育子はそれをメモに残してノートを閉じた。
「ありがとう。お姉ちゃん」
「あとは育ちゃんのイマジネーション次第よ」

　徳子はそういうと軽やかにほほえんだ。

「わかりました。それでは十時半頃にお伺いします」
　徳子はそう言って電話を切った。

　『ラヴ・山形』の編集室の一角。徳子の他に七人が勤めている。日曜の朝は、アポイントを取ることが多い。徳子は、今日も電話でアポを取っていた。
「風間さん、どうだった？」
　そう訊いたのは、編集長の上山さんだ。上山さんはいつも鳥打帽（ハンチング）を被っている。それが上山さんのトレードマークである。五十代半ば。男性が一番仕事ができる年代の一つだ。
「はい、今日の午前中に伺うことになりました」
　はきはきと徳子は答えた。
「良かった。難しい人だからな、あのムシパン屋さん」
　上山さんが帽子の位置を直しながら呟いた。
「編集長、明日の取材なんですが、着物の着付けの先生……」徳子が口を開いた。
「ああ、倉田さんね」上山さんが続ける。
「倉田さんがどうかした？」
「はい、実はカメラマンの方を同行させて欲しいんです」
　『ラヴ・山形』の編集室では、基本的に取材するライターが写真まで撮影する。写真の力が必要なときだけ、カメラマンも同行して取材するのだ。
「今回の着物の記事に写真を入れたいと思ったので……」
「ああ、それなら良いよ」上山さんがにこやかに頷いた。
「有難うございます」
「なら、山村君に行って貰おうかな」
「山村さんですね、分かりました」
　山村実は、三十五才の独身男性である。少し気恥ずかしいな、と徳子は想いを馳せた。山村はフリーランスのカメラマンで、背が高くがっしりとした体型をしていた。外見とは違って、優しい印象を徳子は抱いていた。
「明日は何時から？」上山さんが尋ねた。
「はい、午後二時からです」
「大丈夫かな、今訊いてみるよ」
「宜しくお願いします」
　上山さんは携帯を取り出すと、電話をかけた。
「やあ、久しぶり。最近どう？　ならいいけど。ん、急ぎの仕事。明日の午後は空いてる？ああ、良かった。うん、宜しく」
「大丈夫でしたか？」徳子が電話を切ると直ぐに尋ねた。
「オーケー、オーケー。来てくれるって」
「良かったです」徳子は溜め息をついた。
「じゃあ、今日のムシパン屋さんの取材と、明日の着物の先生の取材、宜しくね」
　上山さんは機嫌良くそう告げた。徳子は頷き、一礼した。
「では、行ってきます」

「すると、このムシパンは、無添加なんですね」
「そうです。卵も使用していないので、卵アレルギーの方も大丈夫ですよ」

　爽やかな四月の午前中——。雪国の春は待つ心が大きい分、楽しい季節である。その四月の輝きの中で、徳子はペンを走らせていた。

「では、後程写真を撮らせて下さい」
「分かりました」

　取材は三十分程で終わった。次に写真を撮ろうとした時、徳子はムシパン屋さんの男性店長に言葉を掛けた。
「あの、どうしてこのお店をはじめようと思ったんですか？」
「実は、娘が卵アレルギーなんです。卵を使わない美味しいおやつを、と思って」
「そうなんですか」
「はい」店長は嬉しそうに頷いて続けた。
「娘がこのお店の一番のファンになってくれるように、努力しているんです」

「素晴らしいですね」
「ありがとう」

　それから徳子は写真を二・三枚撮ってムシパン屋さんを後にした。心の中に店長の嬉しそうな笑顔だけが鮮やかに残っていた。

「ただいま」
　徳子が家に帰り着いた時には、午後七時を過ぎていた。四月の空は大分暮れかかり、肌寒い風が玄関にも入った。
「おかえり、お姉ちゃん」
　育子だった。手には何やらボウルを持っている。夕食づくりの途中だったのだ。
「ただいま。育ちゃん、夕飯のお手伝い？」
「うん。今日はお好み焼きよ」
　育子が生地をこねながら呟いた。
「あら、それは楽しみね」
　二人はキッチンへと入っていった。優しい香りが徳子の鼻腔をくすぐった。
「お帰り、徳子」
　母の逸子がスープを温めている。キッチンのテーブルには、ホットプレートが用意されていた。
「お姉ちゃん、みんなで食べる夕食って楽しいね」
「そうね」徳子が頷いた。
「どんな人も独りではないのよ」逸子が静かに、だが力強く伝えた。
「いつも有難うね、お母さん」徳子が洩らした。

　それは慎ましやかな晩ごはんだった。ジューと音を立てる生地を、無言で逸子が返した。香ばしさと甘さが三人の心を温めてくれた。
　お好み焼きのソースをかけながら、育子が徳子に話しかける。
「お姉ちゃん、この間の小説……」
「んー。どうなった、育ちゃん」
　丁度焼き上がったお好み焼きを、逸子がよそってくれた。
「んとね、また詰まっちゃった」育子は苦笑いする。
「あら、どんなお話し？」
　逸子が口を挟んだ。
「お母さんには、内緒よ」
　育子は小声をたてた。「後でお姉ちゃんには見せてあげるね」
「あら、私は仲間外れなの？」
「そうなのよ」徳子が笑いながら、逸子に言葉を返した。
「じゃ、後で持ってくるね」育子はそうとだけ言うと急いでお好み焼きを食べ始めた。
「私も、いただきます」
　それは温かな夜のはじまりだった。

『昔、カルダ国には「戦士の集い」という会がありました。その会に、イッソクさんのお父さんが向かったのです。それきり、イッソクさんのお父さんは帰ってきませんでした。
　心配したイッソクさんは、お父さんを探しに会の仲間の所へと行くことを決めました。イッソクさん、十七の誕生日のことでした。』

「なかなか良く書けてるよ、育ちゃん」
「ありがとう、お姉ちゃん」
「育ちゃん、タイトルはどうするの？」
「うーん、『イッソクさんの旅』というのは、どうかな」育子が小首を傾げながら呟いた。「ストレートすぎるかな、お姉ちゃん」
「良く伝わるよ。『想い』をカタチにするのが『コトバ』なのよ」
「『想い』？」
「そう、全てのものには『想い』があるの。風にも人にも、神さま仏さまにもね」
「じゃ、この万年筆にも？」
「勿論よ」
　育子は万年筆を愛おしそうに手で掴んだ。白い万年筆が鈍く輝く。
「お姉ちゃんから貰ったこの万年筆は、『書きたい』って言ってるみたいよ」
　育子が恥ずかしそうに告げた。徳子がほほえむ。
「そうね、育ちゃん」
「ありがとう、お姉ちゃん。また書いたら、見て欲しいけど、いいかな？」
「いいに決まってるでしょ」

「うん」

　「物を書く」ことは不思議なことである。とりわけ紙に物語を書くときには、忘我と一体感の快楽に満たされる。どんな人も、自分の生み出す物語の結末は、把握できない。時に右往左往する筋書きに、自分でもどうしようもなくなるのだ。「それでいい」と徳子は思った。物語は独りで書くものではないのだ。

「育ちゃん、大事なのはイマジネーションよ」

　徳子は何度もそのことを繰り返した。時々手を止めて「夢想すること」。それが大事なのだ。物語を生み出すのは人である。そして神さまや仏さまの場合もある。その時重要なのは、どんな時も想いを馳せること。物語の主人公に、読む人に。イマジネーションをもって、書くことこそが何よりも大事なのだ。それは徳子の到達した真理なのだった。

5

　翌日のお昼頃、風間徳子は『ラヴ・山形』の編集室に顔を出した。
「お疲れ様です」
「ああ、ご苦労さん。風間君、昨日のムシパン屋さんの記事、なかなか良かったよ」
「有難うございます」
「メールで送って貰った原稿を、いま佐藤君にデザインをかけてもらっているところなんだ」
　佐藤秋吉は、二十代後半のデザイナーだった。記事は徳子のようなライターが書いて、編集長の上山がチェックをする。それをデザイナーの佐藤が、社内でレイアウトして校正用紙をつくるのだ。
「編集長、こんな感じでどうですか？」
「どれどれ。うーん、いいと思うけど……。風間さんにも見て貰って」
「はい」
「では、拝見します。色合いが良いですね。あ、このキャプション、もう少し大きくしてください。……その位で、大丈夫です。いい感じですね」
「どう、風間さん」上山編集長が尋ねた。
「なかなか良いと思います」
「良かった」佐藤が洩らした。

「ところで、カメラマンの山村さんですが……」
「ああ、もう少しで来ると思うよ」
「取材ですか」佐藤が訊いた。
「ええ、着物の着付けの先生なの」
「ああ、倉田さんですね」
「ご存じ？」
「ええ、茶道の先生もしているんですよ。姉が昔習っていたんです」
「そうなんだ」
　今日、佐藤は珍しく口数が多かった。機嫌が良いらしく、時々鼻歌も出る。
「佐藤君、何か良いコトでもあった？」
「分かります？　実は僕……」
「どうしたの？」
「新しいゲーム機を買ったんです。これが面白くって」
「どうりでニコニコするわけね」徳子が頷いた。
「今日も帰ったら、直ぐ遊ぶんです」
「良かったわね」
「はい」

　そんな会話をしていると、編集室のドアが開いた。
「こんにちは」
　山村実だった。カメラを収めているショルダーバッグを肩に掛けている。
「よう、山村君。元気そうで何より」
　上山編集長が右手を軽く挙げた。
「ご無沙汰しております。今日は宜しくお願いします」
　そう言って、徳子は軽く会釈をした。何か胸に去来したが、それを感じないように徳子は意識を留めた。
「こちらこそ、宜しく。今日の取材先は、着物の先生なんだって？」
「ええ、そうなの」徳子がはにかんだ。
「今日の取材のテーマは？」
「はい、着物着付け教室の生徒の募集だそうです」
「分かった」山村は頷いて、ショルダーバッグからカメラを取り出して、レンズを交換した。
「あと三十分で出発しますから」
　徳子がそう伝えると、山村はにこやかに微笑した。
「今日は、僕が車を出すよ」
「有難う」

「……だと、今月末からの教室開始なのですね」
「そうなんです」
　徳子が素早くメモを取りながら丁寧に尋ねた。傍らで山村が静かに聞いていた。

「着物の写真は、この打掛とそれからこっちのが良いかしら」
　倉田は六十近い年齢であるそうだが、全く老けて見えない。四十代と云っても通るだろう。手のつやが年齢を物語っていた。その瞳はよく動き、好奇心旺盛で活発な少女を思わせた。
「着物は広げて吊るして下さいね」
　山村が口を挟んだ。口数は少ないものの、着実に仕事をこなすタイプの男性だった。
「では、これを撮影しておいてください。私ちょっと別な柄を取りに行ってきます」
　倉田はそう言うと部屋を出た。後には徳子と山村実が残された。
　山村は何枚かシャッターを切った。プレビューで見て、徳子の方へと向けて見せてくれた。
「キレイね」と徳子。
「美しいものは、美しく写るんだ」
「難しいものを易しく書くのが私の仕事よ。貴方は？」
「美しいものを美しく写す。醜いものは撮らない主義なんだ」そう言うと山村は笑った。
「なら、私は被写体として合格ラインかしら？」
「どうだろうね」
　そう言って二人は笑い合った。

　それは春の午後の事だった。

「ただいま」
　徳子が家に帰ってきた。玄関で靴を脱ぎ揃えていると、育子がやってきた。
「お帰り、お姉ちゃん。今日はお鍋よ」
　育子は手にお玉をもち、にこやかに告げた。
「あら、それは楽しみね」
「うん。もう少しで完成よ」
「徳子、お帰り」キッチンから母の逸子が声を掛けた。
「お姉ちゃん、今日も取材？」育子が尋ねる。
「そうよ、今日は着付けの先生よ」
「そうなんだ」育子が相槌を打った。
「もう記事を書いたのよ」
「お姉ちゃんにとって、文章って何？」
「難しい問題ね」
　少し考えてから、徳子は口を開いた。
「私にとってはね、育ちゃん」
「うん」
「『歌』みたいなものよ」
「うた？」
「そう、はな歌みたいなものなの」
「面白い表現ね」逸子が口を挟んだ。
「うん。『歌』って、辛い時に唄うと力が湧いてくるでしょ」
「よく分かる」育子が頷いた。
「『もう駄目だ』ていうときに、自分の文章を読み返すの。そうするとね、力が湧いてくるのよ。『もう少し、頑張ってみよう』って」
「いいなぁ、お姉ちゃん。文章が上手く書けて」
「有難う、育ちゃん」徳子が微笑んだ。
「私も、学校の小論文、頑張ってみようかな……」育子が小さな声で告げた。
「あら、育ちゃん」逸子が驚いた様子で振り返った。「遂に進路を決めたのね」
「うん。文系の大学へ行こうと思うの。推薦入試で、小論文があるのよ」
「そうかぁ」徳子が相槌を打った。
「明日、先生に伝えようと思うの」
「大人になったね、育ちゃん」
「うん」
　逸子が鍋をテーブルの上に乗せた。
「今日はお祝いね。育子が自分の進路を決めた、記念日ね」
「何記念日にする、育ちゃん」と徳子。
「ん？」
「ほら、『サラダ記念日』ってあるじゃない」徳子はそう言うと、一寸真剣な眼差しになった。
「そうねぇ……」
「どうする？」
「『ポン酢記念日』はどうかなぁ」
「いいと思うよ」と徳子。
「そう。名前よりも決めた事の方が重要ね」徳子が頷いた。
　徳子は鞄から手帳を取り出して、頁をめくった。
「ええと、今日は四月十六日か……」
　徳子が素早くボールペンを走らせる。
「お姉ちゃん、手帳っていいね」
「そう？」
「『未来のことを生んでいる』ようなものね」育子が呟いた。
「未来を書き留めるのね」徳子が頷く。
「素敵な言葉ね」逸子が洩らした。
「いつか私も、お姉ちゃんみたいになりたいな」
「なれるわよ、育ちゃんなら」徳子がやさしく肩に手を置いた。

「うん」
「さ、お鍋を食べましょ。冷めないうちにね」逸子が器を手に取った。

　未来とは、常に自分で書くものである。自分の夢、そして理念。それを書き留める手帳を徳子はもう一度見た。未来を描く時、人は自由になれる。その時に想像力が必要となるのだ。イマジネーションの翼を駆って、空を飛ぶのは愉しいものである。その感覚を忘れないようにしたい、そう徳子は思った。いつまでも育子のように純真でいられないのかも知れない。それでもいい。徳子は想像力の力を信じてゆくのだろう。人が人である限り。徳子が徳子である限り。
「育子、熱いから気をつけてね」
「ありがと、お母さん」

――　育ちゃん、想像力よ。イマジネーションを使うのよ。

徳子は事ある毎に何度もそう繰り返した。それは四月、始まりの季節の事だった。

（結）